

# グループホームとは何なのか？

～こんな時代にグルホかよ？～

【 キーワード： 地域生活・グループホーム・歴史的背景・実践・分断・曖昧さ・ケアの原像 】

所属 社会福祉法人ひかりの園 浜松協働学舎 グループホームすてっぷ 氏名 大橋 正季

## 1、前回の作業所学会での問い

グループホーム（以下GH）の実践報告の中から増田先生が投げかけた問い「GHとは利用者さんにとってどんな場所なのか。」それを受けたクープの加藤さん。ずっとその問いへの返答を考え続けていた。

## 2、問いへの返答を探る

今回の学会開催に際し、加藤さんから連絡、依頼をもらった浜松市にあるグループホームすてっぷの大橋。東部のグループホームの職員連絡会に参加させてもらい、先の問いについての話し合いを行う。各法人の取り組みを伺い、その文化の多様性を改めて知る。利用者の希望に応じて通過施設のような機能をもつGHもあれば、高齢の方が多く看取りまで行うスタンスのGHもあった。また近年は介護保険の分野からの参入や、重度の知的障害を持つ方の支援付き単身生活やシェアハウスという選択肢も少しずつ広がってきている。問いに答えるため、これを機に、GHの歴史的背景や発展、出自により持ちやすい文化や、そのメリット、デメリットなどを整理してみたいと考えた。その中で問いへの答えを探ってみたい。本来は個別の実践報告から探りたいところだが、今回は敢えて、各GHや法人という少し大きなカテゴリーからの実践報告の中で検討するという形式をとる。

## 3、グループホームの歴史、背景

グループホームのみならず、障害を持った方の住まいの場の歴史的な経緯を簡単に

まとめてみる。今回は大雑把ではあるが4つの主な文化に分類を行った。

コロニーの建設が隆盛だった時代から地域福祉の時代に移行していく中、住まいの場も小規模化、地域移行へと舵が切られていく。ひとつは、その中で大規模収容型の施設への批判として出てきたGH。多くが大規模な施設を持つ法人が自ら作ってきた。そのため社会福祉法人が経営している場合が多い。長年のノウハウの蓄積により、理念や経営基盤、重たい障害を持った方への対応が丁寧に行えるところが多い。反面、法人内で24時間支援することが多いため、支援者が全権的、管理的になりやすい、過剰に保護的になるという傾向を持ちやすい。

二つ目は、コロニー隆盛時代の前から地域福祉に邁進していた旧・小規模授産所等、通所施設が運営するGH。地域との繋がりを持つのがうまく、暮らし方も保護的になり過ぎない印象がある。「働く」という文化を大事にするが、反面、働くことができなくなった時には高齢施設へ移ることが前提となる場合が多い。

3つ目の分類として介護保険の流れから派生してきたGH。介護保険のGHの経営に近い。20名規模で、ショートステイの機能を持ち、日中もGHで過ごすことが制度上できるようになっている。まだ数は少ないが近年早いペースで全国に普及してきている。

最後は身体障害の方たちの自立生活運動の流れをくむ暮らし方。これはGHではなく、むしろGHを否定する形で出来てきて

いる。重度訪問介護が知的障害を持った方にも利用が拡充されたことを受け、全国でまだ少数ではあるが、重度身体障害の方のように24時間の支援を受けながら地域で単身生活を送る事例が出てきている。障害を持った方は、少人数であっても集団で暮らすということが前提とされることに疑問を持ち、まずは支援付きの単身生活が提案されるべきだという「知的障害者の自立生活についての声明文プロジェクト」という試みもなされている。今回の副題である「こんな時代にグルホかよ？」はこうした流れの中から時折私たちに寄せられる痛烈な意見を、取り入れたものだ。

#### 4、様々な実践から答えを探る

上記を踏まえたうえで様々な法人の実践報告を行う。建物、体制、余暇、文化など実に多様。やはり問いに対して明確な答えが見つからない。GHはその多様さ故に、様々な要素が複合する場になっている。施設でありながら家であり、個人の暮らしの場でありながら協働の場であり、専門性が働く場でもあれば、専門性を降ろすことが求められるような場でもある。「曖昧である」ということがGHという場の特性であると言えるのかも知れない。

#### 5、現状を考える

そうしてGHの特性が、本来「曖昧な場である」と考えた時、現状について振り返ってみる。作業所学会のひとつの趣旨でもあると思うが、近年の福祉は、制度化が進み整備されていく一方で、施設が目的別、機能別に分断され、本来ケアの場が持っている多様性や豊かさが損なわれていないかという疑問を持つ。GHにも同様のことが言えるのではないか。前途してきたようにGHは法人によって文化があり、多様化している。一見、利用者はその多様な中から自分に合っ

たものを選ぶことができるように思えるが、本当にそうか。反対に、「自分たちのGHは〇〇のための施設だからそれに合わない方は介護保険へ。入所施設へ。」という分断が起こっていないか。制度や目的別に利用者が分類されるという一面もあるように感じる。それは私たちが抵抗してきた「地域で見切れなくなったら、今までの繋がりや縁を全て分断して施設に入れる」ということと似ている。

決してひとつの法人で全ての機能を持ち、看取りまで行うことが正しいと言いたいのではない。ただ、ケアの場が本来持っていたであろう、障害を持つ人が、無条件で、ただそこに居てくれればよいという幅の広さ、懐の深さが狭まってしまふことを危惧し、自分の中にも多分にその傾向があることに気づく。

#### 6、ささやかな取り組みの紹介

福祉の場が単純化、マニュアル化していくことにどう抗っていくか。私たちのささやかな取り組みをいくつか紹介したい。人が幸福を追求するために福祉がある以上、哲学的な問いを持つことは避けて通れない。むしろ根底をなすものだと考える。単純化、マニュアル化は思考停止を生む。増田先生の主宰するフロント構造研究会や、私たちが利用者とともにやっている哲学カフェは、その根底への問いを思い出させてくれる機会になっている。自分たちの常識や思い込みを疑い、問い直すことは、少しずつ自分たちの世界に豊かさを取り戻すことに繋がっているように思う。

#### 7、最後に

以上のような課題がありながらも、GHという暮らし方には大きな可能性がある。それについて触れたい。